

九重火山の火山活動について (2001年5月～10月)*

Recent Volcanic Activity of Kuju Volcano (May–October, 2001)

京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター
Aso Volcanological Laboratory, Graduate school of Science, Kyoto University

1. はじめに

九重火山通称硫黄山の噴火活動が1995年10月に始まって6年が経過した。噴火当初は、火山灰の噴出が数回観測されたが、その後は、常時水蒸気の噴出が若干勢いが低下しつつあるもののほとんど変化せずに長期間継続している。

2. 火口状況

新火口群からの噴煙活動は、前回の報告 (2001年5月)¹⁾ と殆ど変化なく、依然としてbおよびc火口列とd火口は活発である。特にc火口列は若干低下気味だが鳴動も活発である。a火口列については、時々a2火口から噴気が時折見られ、a2'火口も従前通り活発で、この火口列の東西地帯では、地熱活動が比較的活発である。

3. 地震活動について

九重火山地域で現在発生している地震活動は、硫黄山付近と山体の西・北西地域の八丁原・筋湯・湯坪地域に震源域がまとまるが、前回報告の2001年5月7日から8日にかけて八丁原・筋湯・湯坪地域での有感地震を多数含む群発活動以後顕著な地震活動はない。

4. 地盤変動について

地盤変動における、星生山山頂を望む辺長測量では、1995年10月から翌年4月までの急激な収縮後も、収縮変化が依然緩やかであるが、ほぼ直線的に長期間継続している。2001年5月の群発地震の影響は少なかったようである。これまでの収縮変動については、季節的変動があるものの継続し、現在までにすでに約80cm以上の収縮が計測されている。この傾向は他の測線でも収縮の絶対量が異なるが、同じである (第1図参照)。

5. 地磁気観測

九重硫黄山における地磁気全磁力変化は、観測を開始した1995年から現在まで連続してほぼ直線的な変動傾向を示している。この変化は、中心位置が星生山の北460m、東200mの海拔高度約1km (地表下50m) 付近にある点源 (球殻など) の冷却帯磁で説明できる。白抜き四角は、携帯用オーバーハウザー磁力計を使用した値で、連続記録とほぼ同じ傾動を示している。図示した日値は、5分観測値から火山研究センターの値を差し引いた後、夜間平均 (0時～4時) を求めたものである (第2図参照)。

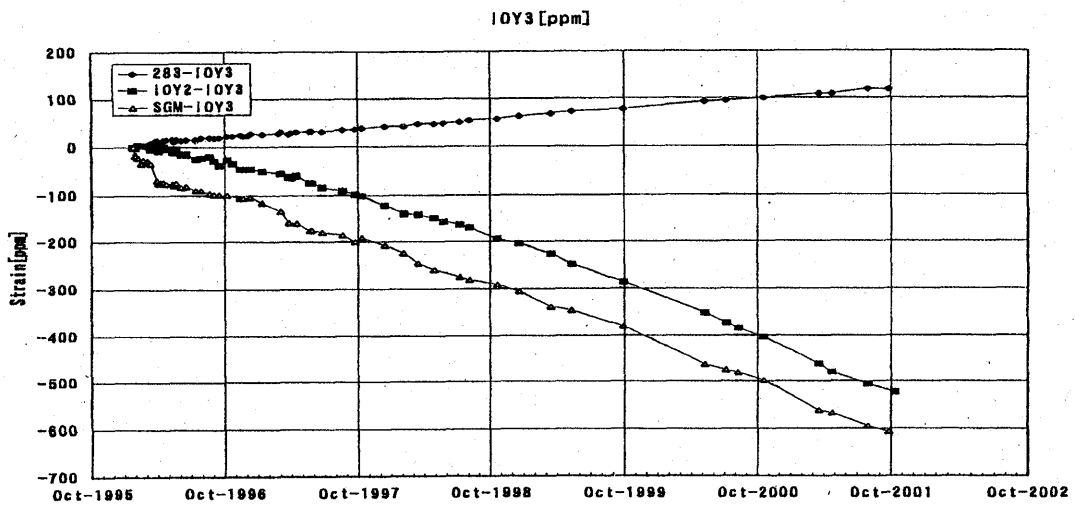
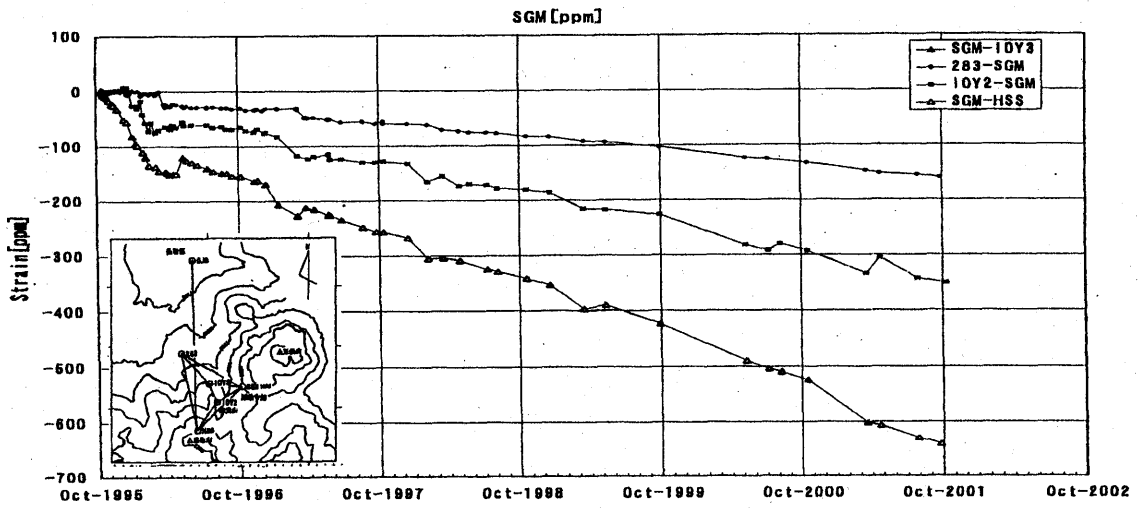
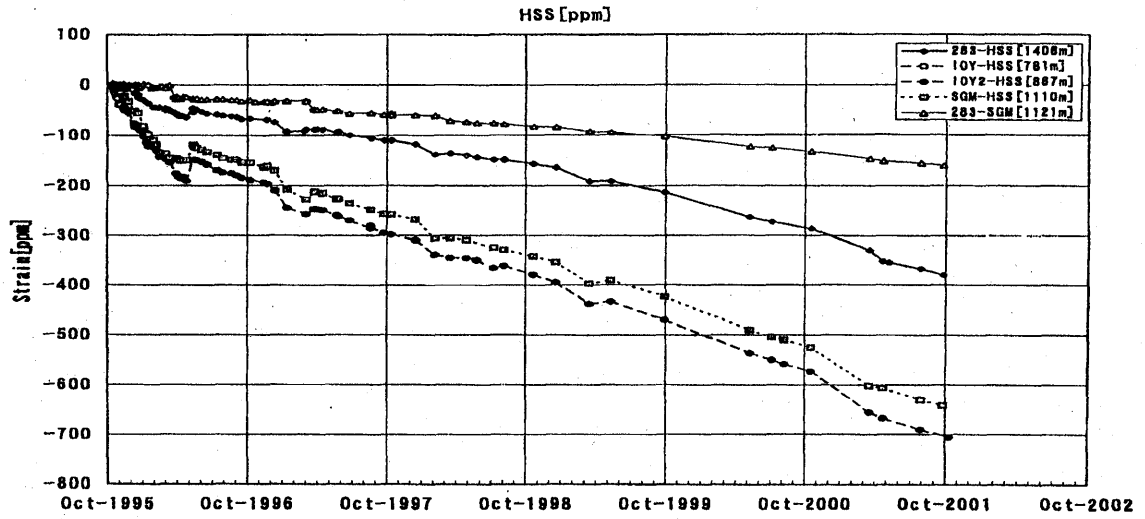
6. まとめ

火口表面活動・地震活動・地盤変動・地磁気のすべてにおいて、前回の報告と同じ傾向が依然継続している。今後、このような傾向が直ちに止まるとは考えられない。

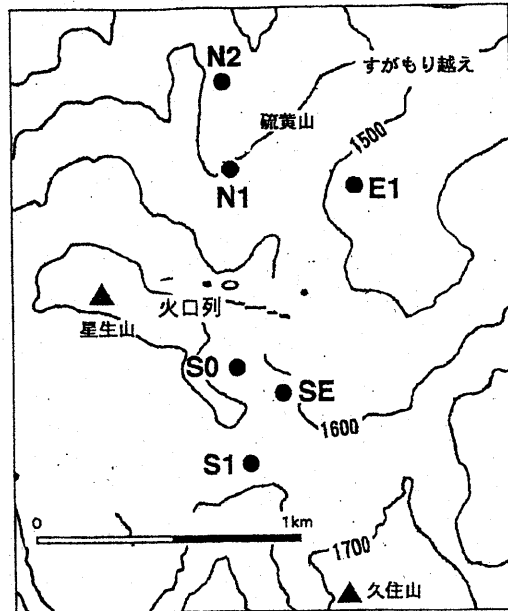
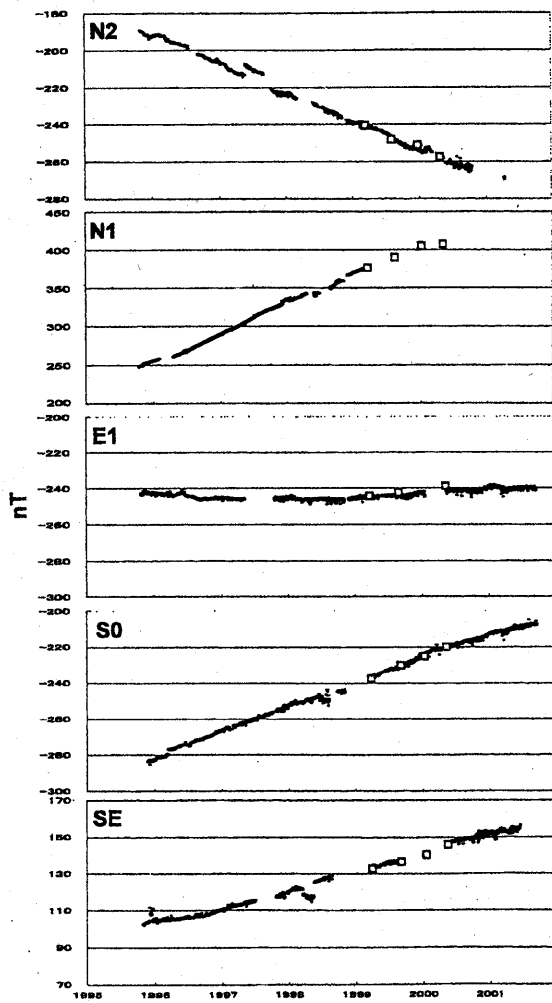
参 考 文 献

- 1) 京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター (2002): 九重火山の火山活動について (2000年1月～2001年5月), 火山噴火予知連絡会会報, 79, 126 - 129.

* Received 10 Dec., 2001



第1図 光波測量による斜距離変化
Fig.1 Changes of Distances at Ioyama Area.



第2図 地磁気観測の結果
Fig.2 Results of Geomagnetic Observation.